

〈研究ノート〉

外国語教育における歌の活用と
異文化理解について
——J-POPのカバー曲を使った試みを中心に——

櫻井 拓也・小川 快之

The Use of Song in Foreign Language
Education for Intercultural Understanding:
An Attempt to Employ a J-POP Covered
in Foreign Languages

SAKURAI Takuya and OGAWA Yoshiyuki

This paper attempts to examine the effectiveness of using a J-POP covered in foreign languages as a teaching material in foreign language education. More specifically, we discuss how a J-POP song (Misia's *Everything*) covered in English and Chinese could serve as an effective teaching material, based on the questionnaires filled out by 200 students (141 from English classes; 59 from Chinese classes). Prior to the questionnaires, we conducted the following in-class activities in both our English and Chinese classes: Students listened to the English and Chinese cover-versions; they practiced singing the cover-versions several times; they listened to the three versions (English, Chinese, and Japanese) again and compared them; and they then evaluated these in-class activities in the given questionnaire forms. The purpose of this paper is twofold: (1) to demonstrate how students evaluated the in-class activities; and (2) to figure out a better method of using music in foreign language classrooms. From the students' evaluations, we suggest that J-POP covered in foreign languages could be an effective teaching material, especially a material that allows students to recognize some phonological characteristics peculiar to the languages and that helps them get interested in foreign languages and their corresponding cultural backgrounds.

キーワード： 外国語教育、異文化理解、歌の活用

1. はじめに

外国語や異文化に対する学生の関心を喚起する教材として、外国語の授業では、従来から、歌を活用する試みがなされてきた¹⁾。では、こうした外国語教育における歌の活用の目的やその教育的効果について、今までの研究では、どのようなことが明らかにされてきたのであろうか。英語の授業での歌の活用については、角山照彦(2001)が、英語の歌の活用に関する先行研究の検討などを通して、英語教育で歌が活用されることは多いが息抜きや学生の関心を引くためのゲームの類として利用されるだけのことが多いこと、その原因は英語の歌の教材としての活用法が教員に十分浸透していないことにあることを指摘し、歌を活用する利点は「学習者の緊張の緩和」「英語のリズムの習得」「文化的価値(異文化理解の促進)」「今日的な言語材料」「授業での扱いやすさ」といった点にあると考え、自然な英語の発話で生じる音声変化や英語のリズムの習得を目的とした歌の活用の試み・教材開発について述べている。さらに、田邊義隆(2004)が、角山論文など英語教育における歌の活用に関する先行研究を再検討し、情意面や動機付けとしての有用性について確認した上で、リズム・発音の改善にどの程度効果的なのか、学習事項の定着(記憶)に有効なのかなどといった問題が今後の課題として残されていると指摘している。早瀬光秋・金冶隆司(2005)も、歌を中心に英語の授業を進める最大のポイントは、その曲のリズムやメロディーの助けを借りて英語の持つリズムや発音を習得すること、言い換えれば日本語特有の拍のリズムを矯正し、同時に子音結合の発音の矯正を図ることにあると述べている。一方、中国語の授業での歌の活用については、小川快之(2010)が、以上の研究なども踏まえて、その有効性について考察し、歌の活用の目的は、「中国語に対する関心の向上」「発音(リズム・プロソディ)学習の強化」「初級文法・語彙学習の強化」「中国文化(異文化)理解の促進」にあると指摘している。

しかし、こうした研究の内容は、学習言語ごとでの試みや検証(例えば、英語授業なら英語の歌だけ)がほとんどである。多文化社会・異文化理解

を意識した観点から考えると、言語の音韻的構造(リズム・プロソディ)・文化的背景に対する理解を深めることを目的とした「(学習言語とそれ以外の)複数の言語の歌の聴き比べ・歌い比べ」という作業も必要ではないかと思われる。具体的には、「複数の言語の歌の聴き比べ・歌い比べ」という作業が言語の音韻的構造に対する理解にどれだけ有効性があるのか、「複数の言語の歌の聴き比べ・歌い比べ」という作業が学生の外国語や異文化に対する関心度の向上にどれだけ有効性があるのか、といった点などについて検証してみる必要があると思われる。しかし、従来の研究ではそうした試みやその効果についてはほとんど触れられていない。そこで、本稿では、「複数の言語の歌の聴き比べ・歌い比べ」という作業の教育的有効性について考える作業の一環として、筆者(櫻井・小川)が大学の授業で行った試みとその結果について紹介・検証してみたいと思う。

2. 今回の試みについて

今回の試みでは、J-POPのヒット曲「Everything(女性歌手:MISIA)」に英語のカバー曲(男性歌手:Eric Martin=エリック・マーティン)と中国語のカバー曲(女性歌手:辛晓琪=ウィニー・シン)があること(つまり、同一の曲で、日本語・英語・中国語の比較ができること)に注目し²⁾、英語・中国語バージョンを、2009年度後期に、筆者櫻井がA大学の必修英語の2クラス(学生数:26名、30名。工学部2年生、経済学部2年生)とB大学の必修英語の2クラス(学生数:各50名。体育学部1年生)で、筆者小川がC大学の初級中国語(自由選択)の1クラス(学生数:23名。教育学部・工学部などの学生が参加)とD大学の初級中国語(自由選択)の1クラス(学生数:49名。理工学部・生命科学部の学生が参加)で、学生にそれぞれ聴き比べ・歌い比べてもらい、授業後、アンケートを実施してみた。

(1) アンケートの実施方法

筆者櫻井の英語授業では、4クラスすべてで2週にわたって授業時間の約半分程度を使用してこの試みを行った。まず1週目では、いくつかの空欄を含む英語版の歌詞を配布し、一度歌詞を見ながら曲全体を通して聴い

てもらったのち、穴埋め作業によるリスニング練習を行った。その後、簡単に日本語で意味を確認し、歌を聴きながら歌う練習をした。そして2週目では、再度英語版の歌を聴きながら、英語で歌う練習を行った。その後、さらに中国語版があることを説明し、正規の日本語版の歌詞、中国語版の歌詞と日本語訳を印刷したプリントを配布してから、日本語版、英語版、中国語版の順に続けて3バージョン聴いてもらった上で、アンケート(内容は付録参照)を行いそれぞれのバージョンを聴き比べ、歌った感想・意見などを書いてもらった。

筆者小川の中国語授業では、まず、中国語版の歌詞(表音文字であるピンインつき)と日本語訳を配布し、簡単な内容説明をしてから、1回、歌を聴いてもらい、その後、1回、歌を聴きながら歌う練習をしてもらった。そして、伴奏なしの合唱練習を何回か行った。その次の授業でも、1回、歌を聴きながら歌う練習を行い、伴奏なしの合唱練習を行った。その後、英語版があることを説明し、英語版の歌詞と日本語訳を配布し、1回、英語版を聴いてもらい、さらに聴きながら歌う練習をもらった上で、前半部分のみ、2回合唱練習を行った。そして、アンケート(内容は付録参照)を行った³⁾。

(2) アンケートの分析方法

今回筆者が行ったアンケートは、「複数の言語の歌の聴き比べ・歌い比べ」という作業の教育的有効性、特に、今後どのような形で「複数の言語の歌の聴き比べ・歌い比べ」を授業で活用していけばよいのか、という問題を、あらゆる可能性も含めて幅広く考えてゆくために、あえてあらかじめ項目を限定することはせず、率直に「学生の声」に耳を傾けることを考え、アンケートは限りなくシンプルにし、各言語バージョンの認知度を確認するための「はい・いいえ」の項目と聴き比べの感想・意見を書く項目とだけで構成した。念のため、各授業では、「成績に影響のないアンケート」であることを説明した上で、自由な意見・感想を求めた。そのため、「楽しかった」「つまらなかった」というような単純な感想から、曲の好き嫌いを述べる意見、さらに、聴き比べ・歌い比べの作業の具体的な教育的効果などを検証するのに役立つ意見など多岐に渡る感想・意見が得られた

(短い感想や意見が大勢を占めるとの筆者の予想に反して、数行に渡って感想や意見などを書き込む学生も多かった)。アンケート実施者であり授業担当者でもある筆者たちに良い印象を与えようとした学生もいるかもしれないが、学生自身が聴き比べ・歌い比べの作業の中から、自発的に何かを発見し、記述したことは、「学生の声」として、分析するのに有益なデータになると考えられる。

回収した学生アンケートは、まず各々の筆者が担当クラス分の各言語バージョンの認知度を計算し、もう一方の筆者が確認作業を行った。次に、全ての聴き比べの感想や意見を両筆者で目を通した上で、英語の授業・中国語の授業ごとに内容の類似性(傾向)を考えながら分析を行った。以下では、代表的な感想や意見を紹介・分析しながら、「学生の声」について具体的に検証してゆくことにするが、聴き比べ・歌い比べの感想や意見は、その類似的パターンから言って、大きく「聴き比べ・歌い比べの作業自体について」「音韻的構造について」「外国語・異文化に対する興味について」の三つに分けることができる(特に、後者二つは冒頭で述べた聴き比べ・歌い比べの作業の教育的有効性と関連する内容であり、分析視点として重要な点になると思われる)。そこで、以下ではこれらの点を中心に検証作業を進めてゆきたいと思う。

3. アンケート結果の概要について

(1) 教材の認知度について

まず、今回の試みについて検証する前に、教材の認知度について確認してみたい。表1「Everythingの認知度について」を見ると分かるように、日本語版は、英語授業でも中国語授業でもほとんどの学生が知っているのに対して、中国語版は全員が知らないことが分かる。また、英語版に関しては、エリック・マーティン(有名な米国男性シンガー)がカバーをしたということも影響しているためか、英語授業の25%~30%程度の学生が知っていたと答え、中国語授業でも知っていたとする学生がいた(英語版を「知っていた」とアンケートで答えた学生の中には、他の日本のポップスが英語でカバーされていることを記す者もいた)。しかし、英語版につい

でも全体的に見れば知らない学生が大半を占めていた。英語授業のアンケートで、「英語版や中国語版の存在を知ることができてよかった」「日本の曲が外国語でカバーされているとは知らなかった」等と記す学生も少なくなかったことを考えれば、Everythingのようなほぼ認知度100%の日本のポップスの外国語版は、外国語授業と異文化理解との連動を図るための教材として、特に導入部分での教材として適当であると思われる。

表1 Everythingの認知度について

	日本語版	英語版	中国語版
A 大学工学部 (23名)・英語クラス	23	7	0
A 大学経済学部 (27名)・英語クラス	27	8	0
B 大学 (91名)・英語クラス	91	23	0
C 大学 (21名)・中国語クラス	20	2	0
D 大学 (38名)・中国語クラス	37	5	0
アンケート回答者合計 (200名)	198	45	0

(2) アンケート内容の概要について

次に、具体的な分析に入る前に、アンケート内容の概要について確認しておきたい。書かれた内容が自由な意見や感想なので厳密な分類は難しいが、概要を把握・提示するため、その類似性(傾向)を考えながら、あえて分類し、「聴き比べ・歌い比べの作業自体について」「音韻的構造について」「外国語・異文化に対する興味について」の各内容が全体の中で占める割合を表にまとめたものが、表2「アンケート内容の概要について」である(そのため、この表は、あくまで大まかなイメージにすぎない)。分類作業での大まかな基準は、以下のように考えた。「聴き比べ・歌い比べの作業自体について」: 例えば「聞き比べ・歌い比べが楽しい・面白い」「他の言語の歌を知れてよかった」「英語版、または、中国語版が一番好き」など。「音韻的構造について」: 例えば、聞こえ方、歌い方、雰囲気、発音の仕方、歌いやすさ、「聞きなれている」「聞き取りやすい」など。「外国語・

外国語教育における歌の活用と異文化理解について

異文化に対する興味について」：歌詞の言語表現、文化的背景など。アンケートでは、上記以外に、例えば、「歌うのが楽しい」「カラオケで歌いたい」「歌がよい」など、歌の活用自体に関する内容のものもあったので、こうしたものは、表2の「歌の活用自体」に分類した。なお、「一人一感想・意見」を原則とし、複数の感想や意見を記述したアンケートは、文字数が最も多い（または、重点が置かれている）感想・意見に従って分類した（言語別、外国語習得度別、学部別、クラス別などいくつかのポイントから、感想・意見の傾向やパターンを指摘できる可能性もあるかもしれないが、アンケート方法の見直しも含めて、これらの作業は今後の課題としたい）。

表2 アンケート内容の概要について

	作業自体	音韻的構造	外国語・異文化に対する興味	歌の活用自体	その他、無記載など
A 大学工学部 (23名)・英語クラス	4	14	5	0	0
A 大学経済学部 (27名)・英語クラス	2	11	13	1	0
B 大学 (91名)・英語クラス	31	38	11	10	1
C 大学 (21名)・中国語クラス	8	8	3	0	2
D 大学 (38名)・中国語クラス	6	23	4	0	5
アンケート回答者合計 (200名)	51	94	36	11	8

なお、表2で、A 大学経済学部の英語クラスにおいて、「外国語・異文化に対する興味」に関する記述が多くみられるのは、比較文化をテーマとしたテキストを授業で使用していることが影響しているからであると推測される。

4. 「複数の言語の歌の聴き比べ・歌い比べ」の教育的有効性について

以下では、先述したように、分析のポイントを、(1)音韻的構造(リズム・プロソディ)の理解を向上させる教材としての有効性と、(2)外国語・異文化に対する興味を喚起する教材としての有効性に関する考察という二点において学生アンケートの検証をしてみたい。

具体的な有効性について検証する前に、まず、「複数の言語の歌の聴き比べ・歌い比べ」という作業自体に対する関心について確認しておきたい。英語授業・中国語授業のアンケートでは以下のような記述がみられた。「英語版や中国語版から、日本語版の今まで気づかなかったところを再発見するのは面白かった」(A大学経済学部を受講生より)。「3ヶ国語で聞き比べをする試みはおもしろい」「他の曲でもやってほしい」「英語や中国語以外でも聴いてみたい」「中国語版は初めて聴いたけど、思っていたよりもよかった」「オリジナルは英語だと思っていたので、日本語と聞いてびっくりした」「日本の歌がこうやって他国でカバーされていること知れてうれしかった」「中国語と比較することで英語の見方が変わってきた」(以上、B大学体育学部を受講生より)。「聴き比べはおもしろい」「中国語版と英語版、日本語版を聴き比べられたことは非常に良かったです」「他の言語でカバーされている曲だと初めて知りました。英語で歌えて良かったです」(以上、C大学を受講生より)。「まさか日本の歌が海外でリメイクされているとは知らなかった」(D大学を受講生より)。以上の内容をみると、学習言語以外の歌を初めて聴いた、聴き比べが面白かったとする感想があり、Everythingのカバー曲や聴き比べが、学生を惹きつける教材・作業となっていることが窺える。このことから考えると、(ポップスの)同じ曲を違う言語で聴き比べる作業は、多くの学生が未経験であるように感じられ、外国語教育の中でも学生が興味を感じる作業となる可能性があるように思われる。また、聴き比べ・歌い比べの作業自体は概ね学生に好意的に受け入れられたように感じられる。

(1) 音韻的構造の理解を向上させる教材としての有効性

音韻的構造(歌のメロディーや歌い方も含む)の認識を促す有効性に関しては、英語授業のアンケートでは以下のような記述がみられた。「日本

語版と中国語版に比べて英語版は重い感じがなく、間があまりなかったため軽く感じた」「英語版は語尾をあまり延ばしていない感じがした」「言葉を変えると曲の雰囲気が変わると思った」（以上、A 大学工学部の受講生より）。「英語版は発音を短縮しているためか、音への合わせ方が違っていった」「発音の仕方、強弱がコトバによって違っていった」「英語版では、2つの単語がつながって聞こえると滑らかな音になり聴き心地がいい。その点日本語版は単語量が少なく、区切りや間が大事になってくる」「英語版や中国語版はスケールの大きさを感じた。逆に日本語版では控えめで内包的な想いが描かれているような気がする」「英語版と中国語版は自分の思いを一生懸命相手に伝えようとしているのに対し、日本語版は相手のことを思いつつも押し付けず、一歩引いたところから歌っているような感じがした」（以上、A 大学経済学部の受講生より）。「中国語の発音は透明感があって美しかった。英語の発音は力強さを感じました」「日本語版と英語版では1フレーズでの単語量が違う」「中国語版は忙しく聴こえた」「同じ曲なのに全然違う曲に聴こえた」「日本語版は歌うような曲、英語版は聴くような曲だと感じた」「言葉が違うだけでこんなに印象が変わってしまうのかと思った」「言葉って不思議だと思った」（以上、B 大学体育学部の受講生より）。

一方、中国語授業のアンケートでは以下のような記述がみられた。「英語版よりも中国語版の方が、発音がはっきりしていて、わかりやすい（聞き取りやすい）と思いました」「英語版は中国語版に比べ、歌詞とメロディーがうまく組み合わせられていなくて、少し無理のある部分があった気がしました」「言葉によって、若干メロディーの感じが変わるといった」（以上、C 大学の受講生より）。「英語の歌は単語をつなげたり、冠詞をとばしたりすることがままあるので歌いづらい」「メロディーは、日本語版・中国語版はカラオケでも歌いやすいが、英語版は感情的で歌うのが難しい」「英語版の方が歌いやすい感じだった」「英語版は知っている単語が多いのに歌ってみると発音がとても速く、けっこう難しかった」「英語版のほうが聞き取りやすい。だが、中国語版のほうがやわらかい歌のような気がする」「中国語版は日本語版と同じような歌い方でなじみやすかった。

英語版は多少アレンジがしてあったので、オリジナルと違った印象を受けた」「英語版だとダイレクトに歌詞の内容を伝えているような感じがしました。中国語版はオペラートにつつんで、かつ物語を語るような歌い方をしていたような感じがしました」「言語違いのカバー曲を作るのは難しいと思った」(以上、D大学の受講生より)。なお、C大学の別の初級中国語(自由選択)の授業(学生数:5名)でも同様な試みとアンケートを行ったが、「英語版は言語の問題でもあるがジャズみたいな、速い感じでした。しかし、中国語版は言葉が一つ一つきれいに分かれていて、はっきりしているように聞こえました」という感想が寄せられた。

英語授業・中国語授業ともに、今回はただ聴くだけではなく、より深くその言語を知るために、歌う作業も重視したが、歌ってみた感想などがあることを考えると、そうしたやり方は有効性があることが窺える。このことから、実際に歌うために注意深いリスニングを行い、自分で声を出してみても音声を確認して、聴こえる音声に合わせることで、学生自身が英語や中国語の音声的なパターンを発見し認識するチャンスが得られていることが分かる。また、英語の場合、歌では冠詞などが聞こえない感じになる(その方が自然な会話により近いリズムになると思われる)のに対して、中国語の場合は、基本的に全ての言葉の発音が聞こえるといった言語の音韻的な特徴の違いなどについて学生による指摘があったことを考えると、三つの言語の音韻的構造の違いを学生が認識する作業として、こうした試みが有効性をもつように思われる。英語版が速いという感想がみられるが、それはこうした言語の音韻的特徴と関係していると考えられる。歌いやすさに関しては、学生により違いがみられるが、それは個々の学生の英語・中国語の習得度とも関連しているのではないかと思われる。歌のメロディーや歌い方についての感想も学生によりさまざまであるが、そのような感想の違いが生じる背景には、「男性が歌うのと、女性が歌うのでは曲のイメージが少し違う」(C大学の受講生より)といった感想があったことを考えると、各学生の好みの違いだけではなく、歌手の声質や歌い方の違いも影響しているのではないかと考えられる。

なお、アンケートでは、何気なく思ったことや、ふと感じたことを自由

に記入してもらったので、学生にとって外国語の曲の受け取り方は様々であるが、「日本語版が一番いい」と記す感想が多くみられた。ただ、英語版や中国語版についても「いい歌」「泣ける」「一番好き」などのコメントがあり、また、さらに「中国語版の歌手が一番良かった」などのコメントもみられた。また、聴き比べの感想の中でも、「聴き慣れている日本語版が一番落ち着く」「中国語版は聴き取りづらかったが、英語版はよく聴き取れた」「英語版、中国語版ともに聴き慣れてないせいか、少し違和感があった」「中国語版と英語版は聴きづらかった」「中国語版は中国語を聴き慣れないので何か違和感がある」（以上、A 大学工学部の受講生より）、「日本語版と英語版は自然に耳に入ってくる感じがした」（B 大学体育学部の受講生より）、「やっぱり日本語版の方が聞きやすい（なじむ）」「中国語バージョンも言語に慣れさえすれば楽しく歌えると思う」（以上、D 大学の受講生より）などの感想があり、日本語版への「好意」と外国語版への「違和感」を「聴きなれていること」を基準に判断しているのがわかる。

(2) 外国語・異文化に対する興味を喚起する教材としての有効性

外国語・異文化に対する興味を喚起する教材としての有効性に関しては、英語授業のアンケートでは以下のような記述がみられた。「言葉は違っているが伝わり方は近いものがあったと思う」「言葉を変えても同じような感動を味わえるのはすごいことだと思いました」「各言語でその歌の意味は違ってくる」「日本語版の歌詞と英語版、中国語版を直訳した歌詞とではほとんど意味が違っていたのでびっくりした」（以上、A 大学工学部の受講生より）。「日本語版のネガティブな表現も英語版ではポジティブな表現に変わっていて驚いた」「英語版での比喩表現が直接的でおもしろい」「英語版のストレートな表現は日本人には抵抗があるのではないか」「英語版では、具体的な歌詞が多いのに対して、日本語版では抽象的なものが多い。特に日本語版は、歌の雰囲気や文脈から読み取れる心情がある」「英訳したものを和訳したものが一番良かった」「一度英語に直したものにもう一度日本語訳をすると全く違う表現になりおもしろい」「日本語版は少し切なさを感じられるのに対し、英語版と中国語版はポジティブな気持ちの強さを感じる」「同じ曲から文化の違いを発見することは異文化

を学ぶいい機会ではないか」「言葉が変わっても『愛情』という気持ちを伝える表現としては同じではないか」「言葉によって表現が変わっても、本質的に伝えたいことは変わらないような気がする」「言葉や表現が違っていても、感情は世界共通だと感じた」「日本語版を勝手に正解としていたけど、3カ国バージョンを比べると共通しているところ探す方が大事ではないか」(以上、A大学経済学部の受講生より)。「英語の直訳は情熱的だった」「英語版を訳したら、元の日本語版とは全然違う」「英語版と日本語版の言っていることが違うような気がする」(以上、B大学体育学部の受講生より)。

一方、中国語授業のアンケートでは以下のような記述がみられた。「全部歌詞が違っておもしろいと思いました」「カバー曲ではない歌から中国の文化などが見えてくるかもしれないし、いい歌はたくさんあると思う」(以上、C大学の受講生より)。「歌詞(の日本語訳)はほとんど異なるので、国によってものごとの考え方が少しずつ違うことが分かりました」(D大学の受講生より)。

以上の英語授業・中国語授業のアンケート内容を見ると、3ヶ国語を同時に扱う今回の試みが、学習言語の相対的な把握(学習言語が英語であるならば、英語と母国語の日本語だけでなく、中国語という第3の言語の学習を通して英語について相対的な見地を取得すること)や異文化理解を2国間から多文化社会への枠組みへ導く糸口になっていることが窺える。また、以上の内容を見ると、特に、日本語の歌詞が英語を経て再び日本語へ訳される過程で本来の意味合いが変化することが、新鮮な驚きとして発見されたことが窺える。このような発見は、言葉だけでなく、その言葉が話されている文化を理解する重要性を学生に意識させることができるので、今回のような試みは、異文化理解のきっかけ作りとしても機能する可能性があるのではないと思われる。そのような観点に立てば、英語授業では授業時間の制約からできなかつたが、中国語授業で筆者小川が試みたように、カバー曲ではなく、学習言語が話されている地域で流行しているポップスを使用することで、より高度な異文化理解へ導くこともできると思われる。ただ、英語の授業については数ある歌から実際にどのような歌を選

ぶかは今後の課題である⁴⁾。

さらに、アンケートに歌詞の違いに関する指摘、歌詞に国による違いが反映しているのではないかとという指摘があったことを考えると、(今回の試みではほとんどそうした作業はできなかったが)異文化理解とつなげる作業にするためには、授業の工夫として、歌詞の内容とその文化的背景について説明をする必要があると思われる。また、異文化理解につなげるという観点から考えれば、学生の指摘にもあるように、カバー曲ではない歌も含め、その言語が話されている地域の文化がより色濃く反映しているような歌を選んで、文化的背景との関連性について詳しく説明しながら使用すれば、歌はより教育的効果のある教材になると思われる。

(3) 外国語授業における歌の活用自体の有効性

最後に歌の活用自体の有効性についても少し触れておきたい。歌の活用については、英語授業のアンケートでは、「英語の曲を使った授業はおもしろかった」「洋楽のリスニングは楽しい」(以上、B大学体育学部の受講生より)といった記述がみられた。また、中国語授業では、C大学・D大学の授業とも、Everything 以外に、カバー曲ではない歌、例えば、张韶涵(アンジェラ・チャン)の「隠形的翅膀」(透明の翼)などポップス系の歌も数曲紹介・練習し⁵⁾、その後、「授業で紹介した歌に関心をもったかどうか」ということについて学期末にアンケートを実施したが、C大学の授業では、「はい」(15名)・「まあまあ」(8名)・「いいえ」(0名)、D大学の授業では「はい」(33名)・「まあまあ」(15名)・「いいえ」(0名)・「記載なし」(1名)という結果となった。アンケートでは、歌を導入した授業について以下のような感想が寄せられた。「中国語の歌は聴く機会がないので興味深かった」「中国語を身近に感じるができるのでとてもよいと思います」「面白いです。初心者には「まず興味をもたせること」が重要だと思うのでとても良いと思います」「歌いやすい歌が多かったので、意欲的に取り組むことができた」「ただ読んで書いてをするよりもやる気が出て頑張ることができました」「この授業ではポップスを中心に歌っていたので、若い世代の人たちにとって興味のものであるものであったと思う」「異なる文化に触れるという点で歌はとくにとっつきやすく興味もてる。下手

に文化紹介VTRをみせるより数倍いい」「楽しみながら中国文化に触れることができるとおもいます」「発音の練習にもなるし、言いまわし等も知ることが出来て、理解が深まると思った」「中国語」にプラスのイメージ(楽しいとか)を持った」「歌を通して中国の歌手に興味を持ちました」「中国語の歌について新しいものから古いものまでどのようなものがあるのか興味がわいた(以上、C大学の受講生より)。「歌を歌うことで発音も楽しく学ぶことができたのでとても良かった」「その国の文化と言葉を同時に感じとれる「歌」を語学の授業に取り入れることは合理的でなにより楽しいです」「歌を歌うことで中国語をより近いものに感じることができた」「選曲がよかった」「歌によって中国語の発音などがすんなり入ってきて発音の問題などでとても役に立った」「歌で更に中国語の発音の特徴や日本語との違いなどを楽しめました(以上、D大学の受講生より)。以上の内容をみると、Everythingも含め、授業で紹介した歌(ポップス)が、学生が関心をもつ教材となっていること、また、英語・中国語に対する学習意欲を高めていること、そして、異文化理解につながる教材となる可能性があることが確認できる。

なお、中国語授業で、学生に「カバー曲とカバー曲ではない歌のどちらに関心があるか」ということについてアンケートをしたところ、以下のような結果となった。C大学の授業:「カバー曲」(6名)・「カバー曲ではない歌」(5名)・「両方とも」(10名)。D大学の授業:「カバー曲」(7名)・「カバー曲ではない歌」(11名)・「両方とも」(17名)・「記載なし」(3名)。この結果をみると、学生全体から言えば、関心に特に偏りはないことが確認できる。歌を歌う場合は、学生が関心をもつ教材の方がより積極的に歌う傾向があるが、ポップス系の歌については、カバー曲であるとなしに関係なく、学生の関心はあるように思われる。

また、英語授業・中国語授業のアンケートでは以下のような記述もみられた。「英語版のEverythingを歌えるようになりたい」「自分でも英語で歌が歌えるようになりたい」「英語でも歌詞を見ずに歌えるようになりたい」「英語版をカラオケで歌ってみます(以上、B大学体育学部の受講生より)。「(授業で紹介された歌を)カラオケで歌いました」(C大学の受講生

の学期末アンケートより)。学生の中には頻繁にカラオケに行く者も少なくないことを考えれば、授業においてカラオケで歌いやすいポップスの曲を活用することは、学生が授業以外の場で学習言語を使う機会を増やすことになるのではないかとと思われる。

5. おわりに

以上、本稿では、筆者(櫻井・小川)が大学の英語授業・中国語授業で行った J-POP の歌「Everything」の英語・中国語カバー曲を活用した試みについて検証してきたが、その結果から、「(学習言語とそれ以外の)複数の言語の歌の聴き比べ・歌い比べ」という作業が、多くの学生の関心を喚起する教材になり得る可能性があること、さらに言語の音韻的構造(リズム・プロソディ)に対する学生の理解を向上させる可能性や学生の外国語・異文化に対する関心を喚起させる可能性があることが確認できた。こうした結果を考えると、英語の授業で中国語を、または中国語の授業で英語を、限定的にでも扱うことで、単純な母国語との2次元(2国間)の外国語の授業が、より多面的で多文化社会を意識した授業へと発展できる可能性があること、そうした授業では、今回の試みのように歌(ポップス)を用いることが効果的であることが分かる。

なお、上記の中国語授業のアンケートにも書かれているように、中国語の歌(ポップス)については、学生はあまり知らないと思われるので、聴くことにも歌うことにも新鮮さを感じたと考えられるが、英語の歌についても、「普段、英語の歌(ポップス)を歌うことがあるかどうか」ということについて、中国語授業で学期末にアンケートをしたところ、C大学の授業では、「歌わない」(17名)・「歌う」(5名)・「記載なし」(1名)、D大学の授業では、「歌わない」(41名)・「歌う」(8名)という結果が得られ、英語の歌を歌う学生が多くはないことが分かった。このことから、英語の歌についても、歌う作業は新鮮さがあるのではないかと思われた。また、英語授業では実際に中国語で歌うことは行わなかったが、ほとんど中国語を学んだ経験がない学生から、「中国語のイメージが少し変わった」「中国語を勉強したくなった」「中国語でも歌いたい」などの意見が出されたことを

考えると、歌を通じて新しい外国語に接する新鮮さは異文化への興味を育むのに有効的であるように感じられた。また、今回の試みで、歌の活用が、外国語教育と異文化理解の連動に関して有効性がある可能性があることが確認できたが、各地域で伝統文化も背景にして歌が育まれていったことを考えると、各地域の文化に対する理解を深める作業の一環として、外国語授業や異文化コミュニケーションに関する授業において、各地域の歌の歴史を説明しながら、いろいろな歌を歌うというという作業を導入してみることも教育的効果のある作業になるのではないかと思われる⁶⁾。しかし、今後検討すべき課題も多い。例えば、学習言語の習得状況に応じてその有効性は変化するのか、J-POP以外のジャンルの曲では違った結果が得られるのか、英語の曲の日本語版・中国語版ではまた何か違うのかなどの問題について、さらに検証する必要があると考えられるが、これらの点の検証は今後の課題としたい。

大学の外国語教員は通常各言語同士間ではしばしば情報交換を行うが、他言語間で意見を交換する機会はあまりなく、共同研究を行うこともあまりないのが現状のように感じられる。そうした点から考えると、今回英語教員の筆者櫻井と中国語教員の筆者小川が、外国語教育と異文化理解の連動性を高めるために、共同研究という形で、歌を使用する共同授業案を計画して実践し、その結果の検証作業を行ったこと、また、その結果得られた知見は、従来あまりないものであるように思われる。しかし、今回筆者が行った作業は、ごく初歩的な試みにすぎず、検証作業にも不十分な点がある。また、筆者が不勉強だけでより有効性が高い授業の工夫がなされている可能性もある。ただ、今後、より有効性が高い授業方法を考えてゆくためには、各方面からさらなるご教示を頂く必要があると考え、今回、未熟な内容ではあるが、本稿を執筆することにした。読者の方々のご教示ご批評を賜れば幸甚である。

註

- 1) 英語のポピュラー・ミュージックを題材にした教科書としては、例えば以下のようなものがある。角山照彦・Simon Capper (2003) 『ポップスで学ぶ総合英

外国語教育における歌の活用と異文化理解について

語 改訂版』成美堂。藤井信弘・Stephen Timson (2005) 『ポップソングで楽しく学ぶ実用リスニング』マクミランランゲージハウス。土屋唯之 (2003) 『5 分間ポピュラー・ミュージック』南雲堂。角山照彦 (2001)、飛渡洋 (2002) 参照。

2) Everything の歌詞の冒頭部分は以下のとおり。

日本語版: 「すれ違う時の中で、あなたとめぐり逢えた。不思議ね。願った奇跡が、こんなにも側にあるなんて。逢いたい想いのまま、逢えない時間だけが過ぎてく、扉すり抜けて、また思い出して、あの人と笑い合う、あなたを…」 (作詞: Misia、作曲: 松本俊明、アリスタ・ジャパン、2000 年)。

Everything の英語・中国語カバー曲の歌詞の冒頭部分は以下のとおり。

英語版: 「My life's been sad and blue for, oh, so long. Each day seems like a life time all alone. It's strange to think that you could be someone who is all alone and waiting for someone, too. Oh, how I've dreamed of love to call my own to cherish me as I have never known. Should we meet I know my dreams would come true. And loneliness would fade away, and we would laugh together just the way that lovers do…」 (English Lyrics: Melinda Torrance、アルバム『Mr. Vocalist』、ソニー・ミュージックエンタテインメント、2008 年から) (日本語訳: 「私の人生は長いこと悲しさと憂鬱に暮れていた。毎日が一生涯のように思えて。不思議ね。あなたも私みたいに、ひとりぼっちで誰かを探していたなんて。恋人に『自分の人』とよばれるのを、どれだけ夢見たことか。かつてないほど、私を大事にしてくれることを。もしふたりが会えば、きっとこの夢は叶うはず。そして孤独は消え去り、私たちは笑いあう恋人たちのように…」 対訳: 湯山恵子)。

中国語版: 「为谁祈祷比生命更坚强 在谁身旁比自己还重要 你的微笑有不可思议的能量 穿越过时间的海洋任幸福徜徉 想念着你 比相聚更漫长…」 (松尾隆・加藤徹 (2007) から) (日本語訳: 「誰かのために祈ることは、生きることよりもずっと強く。誰かのそばにいることは、自分のことよりも大切。あなたの微笑みには不思議なエネルギーがある。時間の海を通り抜け、幸せな日々を過ごす。あなたのことを考えている時間のほうが、会っている時間より長い…」 対訳: 松尾隆・加藤徹 (2007) 参照)。なお、松尾隆・加藤徹 (2007) は、J-POP の中国語カバー曲を使った中国語教材で、Everything も紹介されている。今回の試みの中国語版の紹介では主にこの教材を参考にした。

3) 中国語授業のアンケート (内容は付録参照) の「⑤ 日本語の歌のカバー曲とカバー曲ではない歌のどちらに関心がありますか?」の項目は、筆者小川が授業で他の中国語の歌 (ポップス) も教材として使用していることから、中国語授業のアンケートにのみ設けることにした。

4) こうした作業を進める際には註 1) 掲載の教科書等が参考になる。

5) 小川快之 (2009)、同 (2010) 参照。

- 6) 現代の中国語の歌については、石井康一(2000)などで考察さなされており、こうした研究の内容を参考にして、今後、授業方法を工夫する必要があると思われる。

参考文献

- 石井康一(2000)「中国語の歌にみる異文化としての中国——中華人民共和国の愛唱歌を中心に——」『言語と文化(甲南大学)』4号、107-119頁。
- 小川快之(2009)「中国語教育における中国文化紹介の試み」『言語文化論叢(千葉大学)』3号、105-110頁。
- 小川快之(2010)「中国語授業における歌の活用の有効性について」『言語文化論叢(千葉大学)』4号、87-92頁。
- 角山照彦(2001)「英語教育における音楽教材の活用」『広島文教女子大学紀要』36号、9-20頁。
- 田邊義隆(2004)「英語授業における歌の活用に関する理論的概観とその実践」『近畿大学語学教育部紀要』3巻2号、83-100頁。
- 飛渡洋(2002)「歌を利用した大学生用英語テキストについて」『日本獣医畜産大学研究報告』51号、55-59頁。
- 早瀬光秋・金冶隆司(2005)「英語学習の指導における「かな表記」による英語ポピュラー・ソングの導入——特に英語の音とリズムの習得における活用と効果について——」『三重大学教育実践総合センター紀要』25号、29-36頁。
- 松尾隆・加藤徹(2007)『中国語で歌おう! J-POP編』アルク。

外国語教育における歌の活用と異文化理解について

付録 英語授業 (左) と中国語授業で使用したアンケート用紙

Everything についてのアンケート

名前 _____ 学籍番号 _____

1. この日本語の歌を知っていますか。
はい いいえ

2. この英語版を知っていますか。
はい いいえ

3. この中国語版を知っていますか。
はい いいえ

4. 英語版、中国語版、日本語版をそれぞれ聞き比べてみてどのように感じましたか。ふと思ったこと、何気なく感じたことでも構わないので、自由に感想を書いてください。

5. その他、意見や感想があったら、自由に記入してください。

Everything についてのアンケート

学籍番号 [_____] 姓名 [_____]

①日本語の歌を知っていますか？
はい ・ いいえ

②英語の歌は知っていますか？
はい ・ いいえ

③中国語の歌は知っていますか？
はい ・ いいえ

④英語版と中国語版 (+日本語版) を聞き比べてみて感じたことがあったら書いて下さい。

⑤日本語の歌のカバー曲とカバー曲ではない歌のどちらに関心がありますか？
カバー曲 ・ カバー曲ではない歌 ・ どちらにも関心がある